

平成25年度富山県公文書館 置県130年記念特別企画展

ふるさと富山 百三十年のあゆみ

開催期間 / 平成25年9月27日(金)～11月3日(日)

開館時間 / 9:00～17:00

入場無料

会期中無休



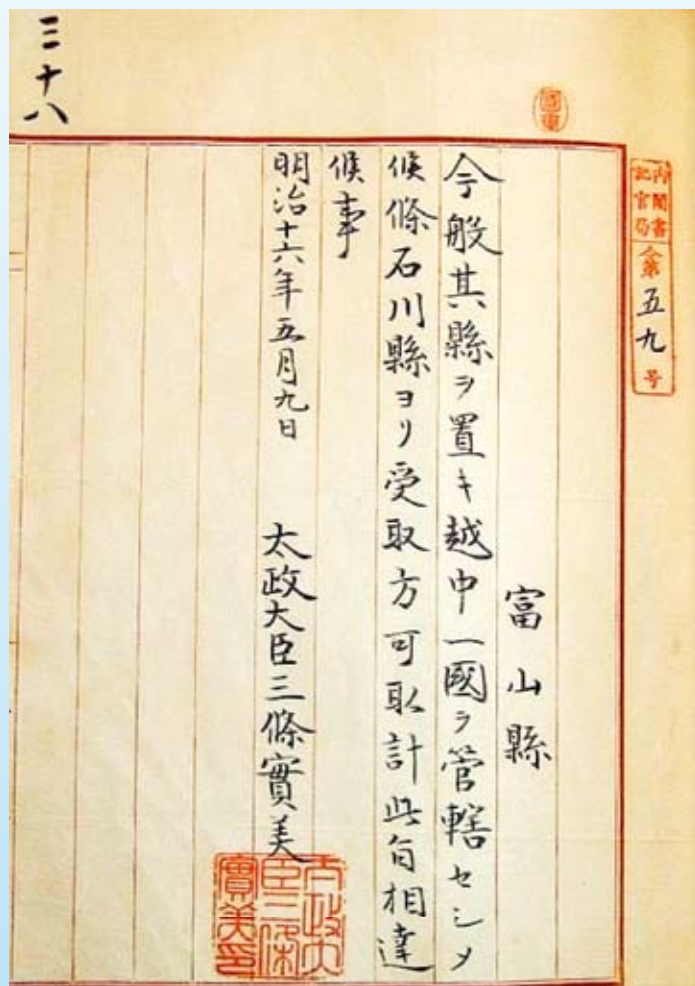
「富山名所 県庁・議事堂」富山県公文書館蔵（河尻家文書）



「富山産業大博覧会会場絵葉書」富山県公文書館蔵（海内家文書）



「石川県婦負郡書記任命書」
富山県公文書館蔵（浅野家文書）



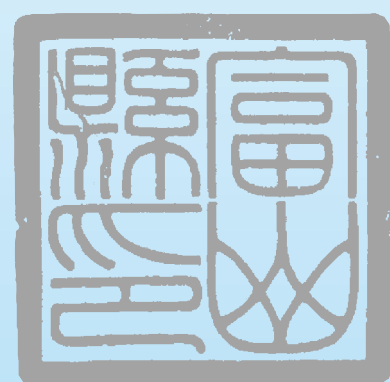
「富山県設置の太政官達」富山県公文書館蔵



初代県令 国重正文



石川県印



富山県印

目次

開催にあたって	1
はじめに	2
一 富山県の誕生と県政のはじまり	2
領域の変遷	
分県の経緯	
初代県令国重正文の施政	
二 産業基盤の整備と近代化する富山県（明治期）	4
道路・橋の整備	
河川改修事業	
港湾整備事業	
鉄道整備事業	
一府八県連合共進会	
三 利水と富山県の発展（大正・昭和前期）	8
電源開発の始まり	
電源王国富山	
富山県の躍進	
日満産業大博覧会	
四 戦後のあゆみ（昭和後期・平成）	11
戦争の時代と富山県の復興	
高度経済成長期の富山県	
新たなふるさとづくり―「元氣とやま」をめざして―	
おわりに	15
◇参考文献一覧	15
◇関連年表	16
◇企画展史資料一覧	17

開催にあたって

今年、明治十六年五月九日に、現在の富山県が誕生して百三十年を迎えました。この五月九日は、今年の三月に条例で「ふるさとの日」と定められました。石川県からの分県以来わが県と県民は、多大な被害に苦しめられてきた急流河川に対する「治水」、それを逆手にとった「利水」（水力発電）、港湾や道路、鉄道など交通網の整備をもとに、たゆまぬ努力により近代化・工業化を進めてきました。特に、いち早く市制が敷かれた富山市と高岡市を中心として、近代産業の育成に力を注ぎ、昭和初期には日本海側有数の工業県に発展しました。そして、戦後の復興期から現在に至るまで、都市計画をはじめ、富山県総合開発計画など時代のニーズと地域性を生かした先進的な取り組みが行われています。

今回の置県百三十年記念特別企画展では、富山県の発展に大きな影響を与えた出来事を取り上げ、歴史や風土など富山県の特性を郷土の発展に結びつけた先人たちの努力の足跡を、当館所蔵の史資料を中心に展示・解説します。また「富山県設置の太政官達」をはじめ、国立公文書館所蔵の貴重な史料も展示し、中央政府との関係にもスポットをあてました。

この企画展を契機に、郷土富山の歴史への関心を深め、今後の活力・魅力あふれる「ふるさと富山」を考える一助としていただければ幸いです。

今回の企画展を開催するにあたって、多くの方々や機関からご協力を賜りました。ここにご芳名を記して感謝の意を表したいと思います。

国立公文書館 富山県立図書館 富山市郷土博物館 高岡市立博物館 入善町米澤記念館

海内宏憲（富山市） 高田光雄（富山市） 庭田千鶴子（富山市） 碓井貞成（金沢市）

河尻裕巳（岐阜県） 古畑弘子（東京都）

（順不同敬称略）

平成二十五年九月

富山県公文書館

はじめに

明治十六年（一八八三）五月九日の太政官達によって現在の富山県が誕生してから、今日までの百三十年間、富山県はその時々の課題に取り組み、県民生活の豊かさを求め、歴史・風土・伝統に根ざした先進性と先駆的取り組みによって粘り強く発展のため努力してきた。

富山県の歴史は、水との闘いの歴史であり、「明治の治水」、「大正の発電」、「昭和の都市計画」といわれてきた。そして平成の今日、「活力とやま・未来とやま・安心とやま」を掲げた未来志向の県政が行われている。百三十年のあゆみを、富山県の発展に大きな影響を与えた出来事を中心に「県の誕生・県政初期」、「明治期」、「大正・昭和前期」、「昭和中後期・平成」の四期に分けて紹介したい。

一 富山県の誕生と県政のはじまり

廃藩置県による富山県の設置とその後の県域の変遷を経て、富山県が石川県から分県するまでの経緯・背景と県政の始まりについて紹介する。

県域の変遷

明治政府は、明治二年（一八六九）の版籍奉還を経て、中央集権国家体制を確立するため、明治四年七月に廃藩置県を断行した。この廃藩置県により、県域は以下のように変遷した。

①明治四年七月、廃藩置県の詔により、富山県・金沢県・大聖寺県を設置（全国で三府三〇二県）。

②明治四年十一月、富山・金沢・大聖寺の三県を廃し、新川・金沢・七尾の三県を設置。この時、越中国射水郡は七尾県の管轄（全国で三府七二県に統合）。

③明治五年九月、七尾県を廃し、射水郡は新川県に、能登一円は石川県に編入。

④明治九年四月、新川県を廃し、石川県に編入。同年八月、敦賀県を廃し、越前七郡も石川県に編入となり、「大石川県」が成立（全国で三府三五県に集約）。

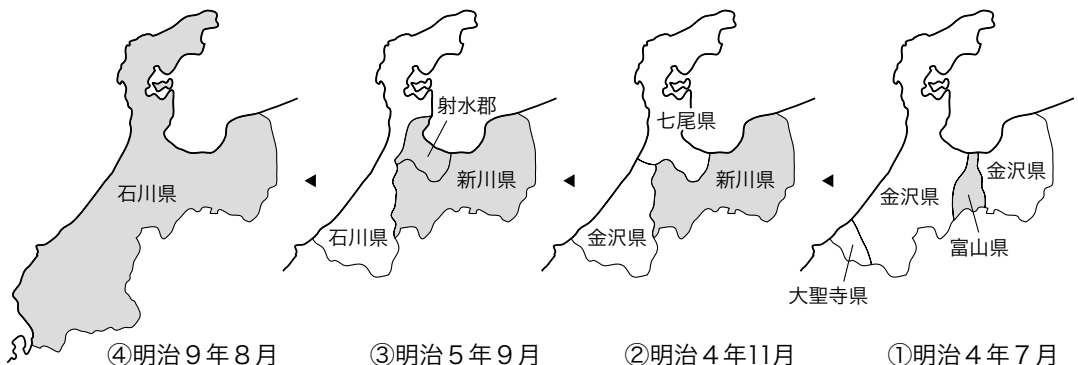
分県の経緯

明治九年の「大石川県」成立は、明治政府の財政負担軽減のための「大県主義」によるものであった。

しかし、合併後の石川県会（現在の県議会に相当）では、多額の費用を必要とする土木費をめくり、越中選出の議員と加賀・能登選出の議員とが激しく対立した。河川の氾濫の多い越中の選出議員は治水工事優先を求めたのに対し、加賀・能登選出の議員は道路工事・県庁舎建設を求めたからである。越中では既に自由民権運動がおこっており、北立自由党の稲垣示など分県反対派もいたが、越中自治党系や越中改進黨の人々を中心に、石川県からの分県を望む声が高まっていた。

まず、明治十四年に、砺波郡出身の石埜謙が元老院に分県の建白書を提出したことがさきがけとなった。石埜謙の「分県之建白書」には、金沢に県庁がある限り旧藩時代とかわらないとあり、封建時代以来のしがらみからの越中人の解放を訴えている。

県域の変遷



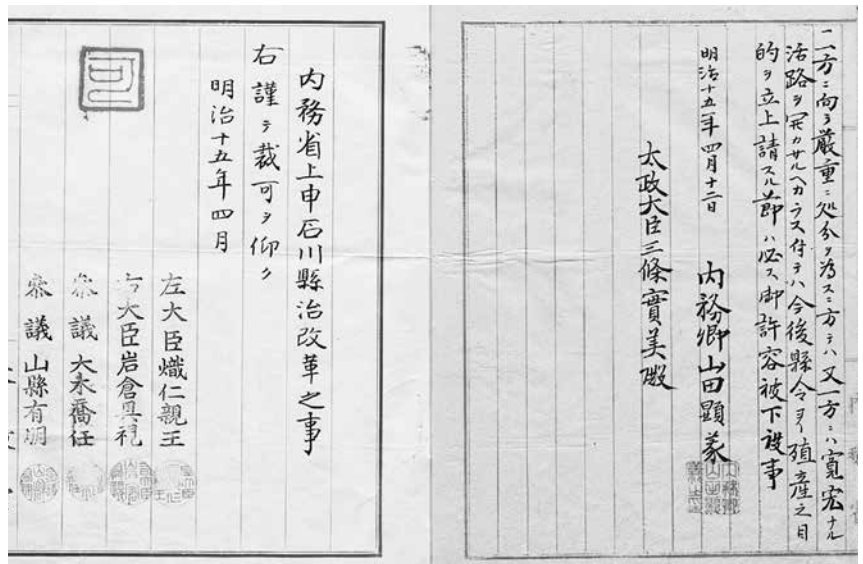
同年、政府の緊縮政策（松方デフレ）によつて、治水事業に対する国からの補助金が廃止されると、石川県会での対立は頂点に達し、ついには県会の解散にまで至つた。越中国内では、石川県からの分県独立を求める声が高まり、翌明治十五年には、入善の米澤紋三郎と富山の入江直友らが「分県之建白」を太政官に提出した。彼らは、岩倉具視・山県有朋・山田顕義ら政府高官と面談し、直接分県を訴えた。こうした越中人の分県運動に「越中国人意識の芽生え」を垣間見ることが出来る。

この頃、全国各地でも分県運動が起きていた。明治十四年二月に石川県から越前七郡が分離し福井県が設置されたことは、越中人にとつて分県を求めるさらなる刺激になつた。

政府は、各地の民情を調査するとともに、新設する県を審議し絞り込んだ。こうして、米澤らの分県運動が実を結び、明治十六年五月九日、太政官は富山県を設置する布告を公布した。ここに、現在に至る富山県が誕生したのである。同十六年五月十七日付「朝野新聞」の記事には「分県饅頭利目あり」と書かれ、当時の富山県民の分県への喜びをうかがい知ることが出来る。

コラム 分県の真相は？

明治十一年（一八七八）に参議・初代内務卿大久保利通が、石川県士族島田一郎らに暗殺された（紀尾井坂の変）ように、明治政府にとつて石川県は難治の県であつた。当時の内務卿山田顕義は、緊縮財政の折とはいえ、分県により石川県を弱体化し、中央集権国家体制の中で治めやすい県へ改革しようとしていた（「石川県県治改革ノ件」国立公文書館蔵）。また、明治十五年十月に「売薬印紙規則」が公布され、売薬に定価一割の印紙が必要となつた。緊縮財政の中で、この税を分県費用に充てようとしたと考えられる。富山県の設置の背景には、越中からの熱烈な分県請願の建白があつたことと、中央政府による石川県の弱体化を図ろうとする方針が合致したというところがあつたのではなからうか。



「石川県県治改革ノ件」(国立公文書館蔵)

明治15年(1882)4月12日内務卿山田顕義から太政大臣三条実美に「石川県県治改革」について上申がなされた。その後、参議らの回議を経て、明治天皇の裁可を仰いでいる。「可」(右大臣岩倉具視の上部の朱印)とあるように天皇から裁可を得たことがわかる。

初代県令国重正文の施政

初代県令には長州出身の国重正文が任命された。明治十六年七月一日に富山城址に県庁が開庁し、十月一日には、第一回富山県会が開催された。

国重県令(明治十九年より県知事)は、自由民権運動が全国的に過激化する中、県内各地から選出された二二名の富山県会議員の意見をよくまとめ、歴代官選知事では最も長い五年六カ月にわたり県政全般の基礎づくりを行なった。



国重正文(富山県公文書館蔵)

置県当時、富山県は非常に財政難であった。「富山県創立費増額トシテ十五年常用金内ヨリ支出」(国立公文書館蔵)によれば、富山県庁は旧富山藩邸の空屋を利用し、開庁予算は五千五百円であった。富山県と同時に分県が認められた宮崎県の一万余六円、佐賀県の九千九百円の約半分ではなかったことがわかる。県は、内務・大蔵両省に富山県創立費増額を願い出ており、置県当時の富山県が厳しい財政状況からスタートしたことがうかがわれる。特に明治十六年当時、県の最大の歳出費目は土木費で、全体の約三二%を占めたように、河川修築費が富山県財政に重くのしかかっていた。

コラム 教育に力を注いだ初代県令国重正文

国重正文は、山口県萩(長州藩)出身で、木戸孝允(桂小五郎)らと同様、萩の藩校明倫館で学んだ。彼は、殖産興業、河川改修、道路整備、コレラの終息、災害対策などに果敢に取り組みとともに、教育改革にも尽力した。富山県が石川県から真に独立するためには教育水準を上げることだとし、児童の就学率の向上に努め、財政難の中、明治十八年に富山県初の中等教育機関である富山県中学校(現・富山高等学校)を創設した。教育問題で国重が最も頼りにした人物が同郷の参議木戸孝允・内務卿山田顕義と東京大学幹事服部一三であった。特に、木戸と山田はともに松下村塾出身で、教育問題に深い関心があり、同郷の国重に大きな影響を与えていたと思われる。県政当初の国重の教育政策は、今日の教育県富山の礎を築いたのではなからうか。

二 産業基盤の整備と近代化する富山県(明治期)

明治期の富山県では、治水事業や道路・港湾・鉄道など交通機関の整備が進められた。こうしたインフラ整備が産業基盤を整え、富山県の近代化・工業化を促進したことを紹介する。

明治二十二年(一八八九)四月一日に「市制・町村制」が施行され、富山市と高岡市が誕生した。全国でわずか三市うちの二市が富山県に設置されたことになる。当時、一府県で複数の都市が市の指定を受けたのは、山形県・富山県・大阪府・兵庫県・福岡県のわずか五府県だけであった。

当時の富山市の人口は五万七七八人で、日本海側では金沢に次ぐ大都市であった。また、高岡市の人口は二万九二〇二人であった。

道路・橋の整備

①道路

道路は動脈である。人と物が自由自在に行き来できることは、近代化に欠かせない要素である。富山県における道路整備の契機は、明治十一年(一八七八)の明治天皇北陸巡幸(越中は九月二十八日〜十月二日)であった。石川県は、これを機会に、天皇の行列が通過する主要道路の改修・開削や、架橋計画を立てた。この計画で最も重視された場所は以下の三カ所である。

- ・越中・越後間の境川橋架橋
- ・婦負郡呉羽山安養坊(現・富山市)の道路の拡幅
- ・倶利伽羅峠天田越え新道の開削

明治天皇巡幸は、新政府の威厳を誇示する一大デモンストラーションであるとともに、その後の県民の交通・運輸上に大きく寄与した。

その後、明治十八年から、初めて国道・県道が確定し、富山県の幹線道路が整備されていった。

②賃取橋

越中の河川は、急流暴れ川が多いため橋を架けにくく、江戸時代には軍事上の理由からも、ほとんど橋を架けなかった。藩政末期まで、橋としては神通川の舟橋と黒部川の愛本橋の二つしかなかった。明治になり、越中国の七大河川の架橋が急がれた。神通川の舟橋は、明治十六年に、神通橋として新しい木橋に架け換えられた。しかし、誕生したばかりの県財政は苦しく、新政府にもゆとりがなかったため、ほとんどは民間人が資金を出して架橋し、建設費や維持費を通行人から取り立てた賃取橋であった。

明治十三年調査の「石川県統計表」によれば、越中国の賃取橋（有料橋）は、二六ヶ所もあった。



「富山名所（神通橋・長岡御廟所）」（河尻家文書）

富山名所は、皇太子殿下（後の大正天皇）の富山市行啓を記念し、明治42年に富山市の高見活版所より刊行された多色刷りの石版版画である。木橋の神通橋は当時の富山市民の誇りの一つであった。

河川改修事業

富山県には七大河川をはじめ、中小河川も多い。これらの河川は急峻な山脈から流れ出るため急流の暴れ川が多く、田畑・人家に甚大な被害を与えてきた。明治時代になっても度々洪水が起こり、治水は県政の最重要課題であった。明治二十三年（一八九〇）に続き、明治二十四年七月にも大洪水が発生した。常願寺川流域の被害は壊滅的であり、この大水害の被害報告書は、時の森山茂県知事により、内務大臣・総理大臣を経て、明治天皇まで上覧された（「森山知事により河川改修に関する上申案」富山県公文書館蔵）。

森山知事の求めに応じた政府は、水害対策のため、オランダ人技師ヨハネス・デ・レーケを派遣した。彼は、明治二十四年以來六回来県し、詳細な調査に基づく実測平面図を作成し、河川改修を指導した。

①常願寺川改修工事

森山知事は、水害復旧の国庫補助を陳情し、工費一〇五万圓中、九五万圓の国庫補助を得た。人材面でも内務省から高田雪太郎をはじめ、琵琶湖疎水工事の測量に携わった当時の精鋭の技術者が招集された。

明治二十四年からデ・レーケの指導のもと、高田雪太郎が指揮をとり改修工事がなされた。常願寺川中流域から下流域にかけて、全長約二〇キロメートルに及ぶ大土木工事であったが、一年半という短期間で完成させた。改修工事の一環としての用水の合口化には、農民の強い抵抗があったが、明治



森山知事による常願寺川改修工事の視察（『置県百年 富山県』より）

二十五年に完成をみた。この「常西合口用水」の完成後も洪水のたびに被害を受けたが、さらに改修工事がなされ、灌漑面積七千町歩を潤し、安定した水を供給できるようになった。

② 庄川改修工事

本県における最初の国営工事として、置県の年明治十六年から始まった。オランダ人技師ムルデルが内務省から派遣されて河川調査を行い、工事が始められたが一部分のみで打ち切りとなり、洪水は治まらなかった。

明治三十年（一八九七）より内務省直轄工事として大規模な改修工事が開始され、十三年間の長期工事となった。河道幅を拡張し、下流に新庄川を掘削して合流していた庄川と小矢部川を切り離し新河口を新湊方面に向けた。さらに、兩岸の堤防の新設・改修を行った。

これにより、庄川の氾濫は激減し、伏木港は庄川の土砂の害から免れ、五千トン級の大型汽船の出入りが可能になった。但し、新庄川によって六渡寺・中伏木が新湊町の中心部と完全に分離されることとなった。

③ 神通川改修工事（馳越工事）

当時の神通川は、富山市北部で東方に曲がり、富山城址の北側を流れ、大きく湾曲しながら北西に流れる蛇行した川であった。そのため、洪水の際には、排水が困難で濁流が市内に氾濫した。これを解決するためにたびたび改修工事が行われた。

・第一次改修工事（明治三十年）として、川幅を拡張した。

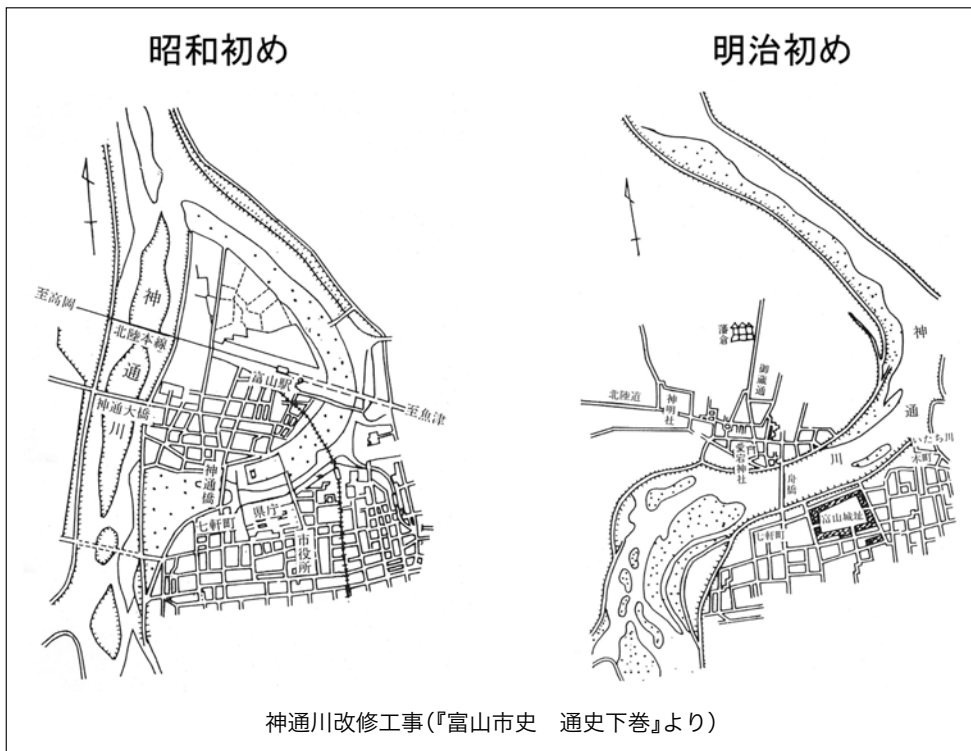
・第二次改修工事（明治三十四年）では、馳越線排水路工事を施工した。また、明治三十六年、新河道にかかる神通大橋を竣工し、馳越工事は完成した。

これにより流水のほとんどが新河道に流れ、旧河道は廃川地化した。

・第三次改修工事（大正七年〜大正十年）では、旧河道を締め切り、神通川廃川地が埋め立てられた。この馳越工事後、分断されていた富山市が一体

化する契機となった。廃川地には新県庁・NHK富山放送局・電気ビル・総曲輪小学校・神通中学校（現・富山中部高校）などが建設され、現在の富山市街地の形成に大きな役割を果たした。

富山県では、こうした治水の努力が、現在に至るまで営々と続けられてきたのである。



神通川改修工事（『富山市史 通史下巻』より）

港湾整備事業

伏木港は、明治三十二年（一八九九）に特別輸出港、特別貿易港に指定されていたが、大正元年（一九一二）に大規模な修築工事が竣工し、三千トン級の汽船が接岸可能となった。翌大正二年の富山県会では、県の発展を考え、伏木港と北朝鮮を結ぶ定期航路の開設が建議された。同年十月には、庄川改修工事により、庄川から分離した伏木港の補強築港工事の落成祝賀会が開催された。

鉄道整備事業

① 中越鉄道

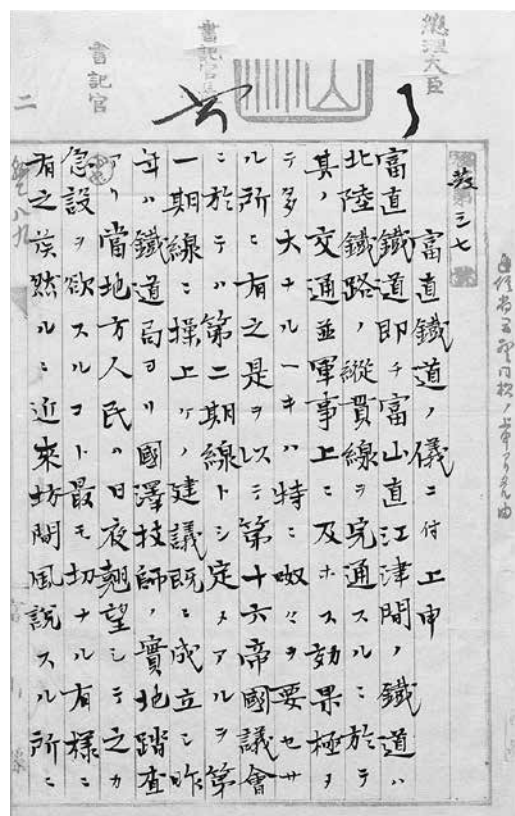
富山県、また日本海側で初めて開通した私鉄であった。明治二十八年（一八九五）、高岡から砺波平野を南下して城端に至る路線として認可され、明治三十一年に全通した。砺波地方で産出される米などの農産物を伏木港に輸送することを目的に敷設された。明治三十三年の高岡・伏木間開通により、高伏工業地帯の形成が促進された。

② 北陸線

明治二十五年の「鉄道敷設法」によって、全国的に鉄道建設が進み、敦賀を起点とした北陸線は明治三十二年に富山まで達した。しかし、富山以東の建設はなかなか進まず、既に信越線が通じていた直江津と富山を結ぼうという富直鉄道敷設の動きが起こった。明治三十二年の富山・直江津間鉄道急設期成会や、同三十四年の富直鉄道期成同盟会等の結成の動きである。

県からも明治三十六年、日露戦争を目前にし、対露関係が緊迫の度を高める中、この鉄道の持つ軍事的重要性を説き、早期着工を求める上申書が通信省鉄道局宛てに提出された（「富山県知事稟申富直鉄道ノ儀ニ関スル件」国立公文書館蔵）。

こうした状況下で、明治三十九年の「鉄道敷設法」の改正によって、ようやく



「富山県知事稟申富直鉄道ノ儀ニ関スル件」
(国立公文書館蔵)

く着工される運びとなった。同四十年に富山、翌四十一年に直江津からそれぞれ工事が開始された。大正二年四月一日に青海・糸魚川間が開通し、ようやく完成をみた。この富直線の完成により北陸本線は米原から直江津まで全通し、富山県は関東圏ともつながることになり、富山県の経済発展が期待された。

③ 立山軽便鉄道

明治四十三年（一九一〇）制定の「軽便鉄道法」に基づき建設が開始され、大正二年に滑川―五百石間が開通した。大正六年（一九一七）には立山鉄道と改称し、同十年に五百石―立山（現・岩峠寺）まで延伸した。これにより、滑川駅と内陸部を結び、沿線の産業開発が可能になった。

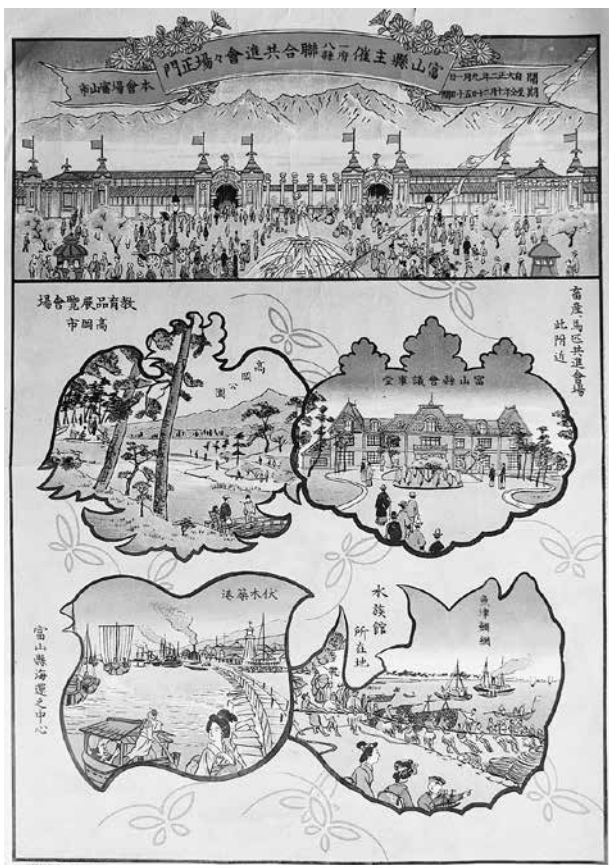
④ 富山電気軌道

大正二年に、富山駅―小泉町間に北陸初の電気軌道（現・富山地方鉄道経営の富山市内電車）が敷設された。これにより、この年に富山市で開催された「二府八県連合共進会」の会場への交通の便と、市内交通の近代化が図られた。今日も富山の市電として親しまれ、今年、敷設百周年を迎えた。

一府八県連合共進会

大正二年（一九一三）年に、上新川郡堀川村（現・富山いずみ高校敷地）を主会場に開催され、共進会の第二会場であった魚津では水族館が開館した。この共進会は、浜田恒之助知事のもと、大正元年の伏木港修築完成、同二年の北陸本線全通を富山県発展の機会ととらえ、県内外にアピールするために開催された。入場者数は七二万六四〇八人に達した。

参加した府県は、東京府と新潟・栃木・群馬・岐阜・石川・福井・滋賀の七県であった。北陸本線の全通により、参加県が北陸本線沿線以外の関東圏に広がった。出品物の中心が農業関係から工業関係に変化したことも大きな違いであった。後の富山県工業製品の流通を強く意識した博覧会となり、富山県の産業界にとって大きな刺激となった。この共進会は、富山県が工業立県に向けて動き出したことを象徴するものであったといえる。



「一府八県連合共進会リーフレット」(河尻家文書)

三 利水と富山県の発展（大正・昭和前期）

富山県は、水力発電による県営の電気事業を推進し、豊富で安価な電力を利用し工業県へと発展した。また、県都富山市の都市計画事業が、臨海工業地帯を形成し、産業の近代化につながったことを紹介する。

電源開発の始まり

分県以来、度重なる水害により富山県の歳出総額に占める土木費の割合は、八〇%を最高に、平年でも二〇%を超えるものであった。こうした水害復旧費が、県財政の窮乏を招いていた。これを克服したのが、富山県による電力事業の推進である。



大久保発電所（『富山県写真帖』より）

た。「電源王国富山」への第一歩であった。

電気事業の目的は、当初から産業用の動力源とすることであった。大正四年（一九一五）に浜田恒之助知事は『経世小策』の中で産業構想を述べ、その方針は「富山県産業奨励方針」にまとめられた。この中で、将来、水力発電事業が本県の産業発達の大きな原動力となることを提唱し、以後富



『経世小策』(富山県立図書館蔵)

山県政の指針となった。

浜田知事の意志を継いだ井上孝哉知事も、とくに水力電気問題について、「全国の発電力二百五十万馬力に対し、富山県は七、八十万馬力の発電能力を包蔵するから、これまでのたび重なる洪水禍を発電により転禍為福とした。将来、無限、無尽蔵の水力発電によって発展することを確信する。」と言及している。

さらに大正八年四月に赴任した東園基光知事は、治水と財政の立て直しに重点を置く県政を行なった。彼は、常願寺川水系の水力コントロールを兼ねた県営発電事業計画を提唱した。これは、工事費二〇六〇万円（当時の県の一般会計予算三六四万余円の約六倍）という巨費を投ずる大事業だった。反対の声も強かったが、事業を推進し、大正九年六月、県電気局が設置され、大正十年、富山県は初めて工業生産額が農業生産額を上回った。大正十三年には、上滝・松ノ木・中山山の三発電所が完成し、運転を開始した。昭和に入り経営も好転し、昭和十一年（一九三六）には、県一般会計予算の八％に相当する一九〇万円の収益を上げ、そのうち七〇万円を一般会計予算に繰り入れるまでになった。

電源王国富山

一九三〇年代半ば、富山県の水力発電における総発電量は約四〇万五千ワットで、昭和九年（一九三四）、同十一年、同十二年には全国一位になった。この頃の電力生産の全国比は二・八％～一三・五％で推移し、富山県は「電源王国」と呼ばれた。

事業者別では、五大電力に属する日本電力が四二％、大同電力の二一％に対し、県営電気が二三％、日本海電気（現・北陸電力）が一三％という割合で、地元の実業者も健闘していた。

昭和十二年末に県内生産した電気五三万五千ワットのうち、約六〇％が県外に送電されて京浜・阪神工業地帯を支えるとともに、残りの約四〇％

は、富山県内の工場で鉄鋼・アルミ精錬・肥料生産などに使用され、富山県の重化学工業興隆を促進するエネルギーとなっていた。

県別電力（水力）の推移

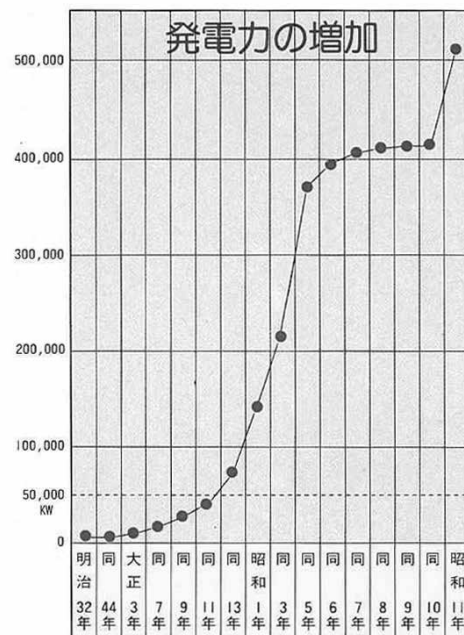
単位:kw

	1934年 (昭和9)	1936年 (昭和11)	1937年 (昭和12)
1位	富山 405,537	富山 499,837	富山 519,486
2位	長野 391,905	長野 493,855	長野 512,440
3位	新潟 284,339	新潟 308,674	岐阜 323,108
4位	岐阜 237,547	岐阜 297,478	新潟 320,110
5位	群馬 210,009	群馬 214,613	群馬 249,044
6位	山梨 201,651	山梨 202,854	福島 231,557
全国計	3,170,615	3,651,547	3,851,615

『北陸地方電気事業百年史』より作成

昭和9年（1934）に、富山県は全国最大の電力生産県（水力）となった。豊富で安価な電力により、工場の誘致が促進され、富山県は、全国有数の工業地帯に成長した。

富山県の発電力の推移



（『置県百年 富山県』より）

大正から昭和戦前期にかけて、発電量の急上昇を読み取ることができる。

富山県の躍進

大正期後半から昭和初期にかけての相次ぐ全国的な不景気の中で、富山県もその影響を受けたが、この時期、富山県には中央から大工場が進出し、新興工業県として成長し、都市の近代化が進んだ時期でもあった。

大正十三年（一九二四）六月、富山市は「都市計画法」の適用都市となった。昭和三年（一九二八）には、富岩運河の建設と神通川廃川地の区画整理、および街路網の新設を軸とした案が決定された。

特に富岩運河の開削は、東岩瀬港と富山駅の水陸連絡と沿岸の工業地帯化を図り、同時にその掘削土砂を廃川地埋め立てに充てようという総合的な事業であった。こうして昭和六年に開始された富岩運河の建設は、昭和十年に完成をみた。

東岩瀬港を中心とする富岩運河周辺には、日満アルミニウム富山工場、日本曹達岩瀬工場、同富山工場、日曹人絹パルプ、不二越鋼材東富山工場、日本海船梁工業などが次々に進出して、臨海工業地帯を形成し、当時日本有数の重化学工業地帯となっていた。これらの工場進出は、富山県の豊富で安価な電力と、朝鮮・満州への進出が注目される中での、原料の運びこみや輸送における地の利が着目されたことによるものである。



トロッコでの富岩運河建設（『置県百年 富山県』より）



日満アルミニウム工場と富岩運河（『置県百年 富山県』より）

日満産業大博覧会

昭和十一年（一九三六）四月十五日から六月八日まで、富山市主催により、富山電気ビルディング・富山県庁などが建てられた神通川廃川埋め立て地で「日満産業大博覧会」が開催された。当時、富山県の水力発電の開発と工業立地が進む中で、伏木港二次・東岩瀬港一次改修完了、高山線開通、廃川地埋め立て・富岩運河の完成、倉垣の飛行場の竣工などのビックプロジェクトが実現した。また昭和七年の満州国建設や朝鮮半島への直通航路開設を背景に、日本海対岸同士が手を結び、新たな日本海交流圏を樹立するという産業発展への期待がこめられた博覧会だったのである。このことは、「日満産業大博覧会」という名称にも現れており、開会式には満州国から大使や参事官等が列席し、祝辞を述べた。入場者は九万三〇三〇人（当時の県人口は八万四一七七人）を数える活況を呈した。



日満産業大博覧会ポスター（富山県公文書館蔵）

藤野江華作。立山連峰、高山線、対岸交易の汽船、飛行機を図案化

コラム 吉田初三郎の鳥瞰図

「日満産業大博覧会」を記念して、昭和十一年に吉田初三郎による「富山県観光交通鳥瞰図」が作成された。この鳥瞰図には、当時の富山県の観光名所が紹介されるとともに、大陸との航路も描かれている。「日満ブロック」形成を背景とする戦前期において、当時の観光ブームのついでに富山県の発展の様子や観光名所を国内外にアピールする上で、デフォルメされ、色彩豊かに描かれた初三郎式鳥瞰図は、非常に魅力的な観光案内図であった。



「昭和11年富山県観光交通鳥瞰図」(高田家文書)

四 戦後のあゆみ (昭和中期・平成)

太平洋戦争は置県以来最大の困難を県民にもたらした。県の産業も転換を余儀なくされ、富山大空襲で県都は大被害を受けた。しかし敗戦の淵から県民は戦後復興を進め、高度経済成長期には著しい産業発展を達成した。その一方で公害問題など社会問題を克服してきた。今日、地方分権、少子高齢社会、グローバル社会等の大きな社会変化の中で、郷土の自然・地勢、歴史や伝統・文化を生かしつつ、県と県民が豊かさ・先進性・先見性をもった取り組みを行っていることを紹介する。

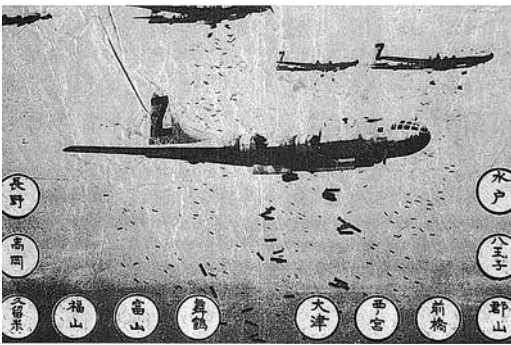
戦争の時代と富山県の復興

日中戦争が泥沼化し、昭和十四年(一九三九)に第二次世界大戦が勃発する中、戦時体制を進めるため「電力国家管理法」が施行された。同十七年に県営電気事業は日本発送電株式会社に吸収され、電力を県政の重要基盤としてきた富山県にとっては大きな痛手であった。

昭和十六年から太平洋戦争の長期化と諸外国の日本への輸出規制により、次第に生活物資の不足が深刻になっていった。

①富山大空襲

昭和二十年八月二日、午前零時三十分過ぎから約二時間にわたって、一八二機の米軍機が来襲、うち一七四機の爆撃を受け、富山市街地は焦土と化した。焼失を免れたのは、鉄筋コンクリート造りであった県庁・警察署・日本興業銀行富山支店・神通中学校などわずかな建物のみであった。公共交通機関も鉄道駅舎が焼失、市内軌道は寸断し、神通大橋をはじめとする木造橋梁も焼け落ちた。同年八月十五日に終戦を迎え、県民は混乱の中、復興へと奔走することになった。



空襲予告ピラ(庭田家文書)



焦土と化した富山市街地(『置県百年 富山県』より)

コラム 富山大空襲と神通川の花火大会

空襲による富山市の破壊率「九九・五％」は全国一で、被害世帯二万四九一四戸、死者二七一八名（『富山市史』）とされている。広島・長崎を除く被災九二都市中、五大都市以外では、人口比からみると最大の被害を受けたことになる。富山への空襲の理由として「米国戦略爆撃調査団文書」（国立国会図書館蔵）には、次のような内容が指摘されている。

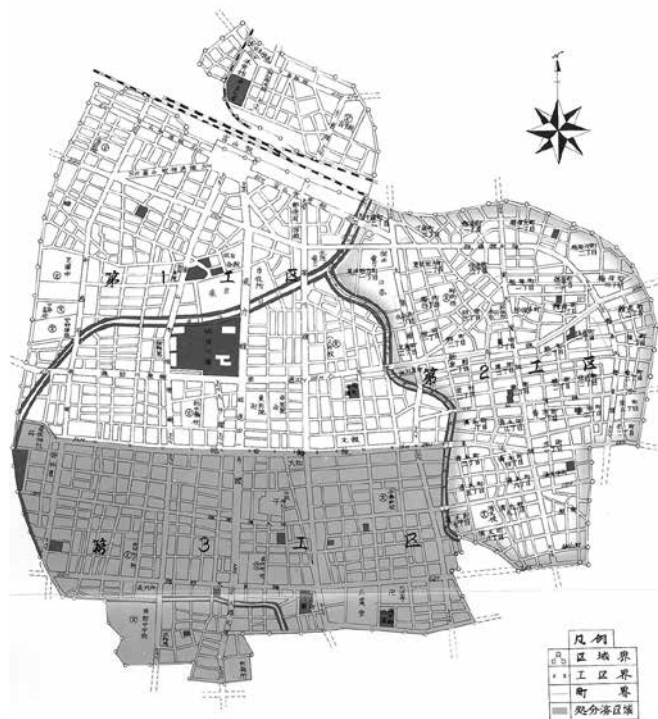
- ・ 本州の日本海側第三の都市であり、比較的新しい軍事施設がある。
 - ・ 日本最大のアルミニウム会社のほかマグネシウム工場がある。
 - ・ ボールベアリング、特殊鋼、精密機械・精密工具の重要な生産地である。
- つまり、米軍は富山を、地方都市でも日本海側有数の工業都市・軍需産業都市として認識していたのである。

毎年、八月一日に神通川河川敷で花火大会が開催されている。これは、富山大空襲の犠牲者の鎮魂と戦後復興の願いをこめて、昭和二十二年にはじめられたものである。

② 戦災復興都市計画事業

昭和二十年九月一日、市街地の大半が灰燼に帰した富山市では、市役所が「復興部」を新設、さらに「復興審議会」を設置し、十一月には政府により「戦災復興院」が設置され、復興事業を一括援助する体制がとられた。富山市は告示第一号の指定を受け、同年十二月、富山市の戦災復興都市計画街路が決定し、中心街路は幅三六メートルの県庁線（現・城址大通り）とされた。また、県庁線と総曲輪線（現・平和通り）を交差させて市内を四分割し、碁盤目状に街路が設けられた。これにより、戦災からの復興の第一歩が始まった。

富山復興都市計画施行区域図

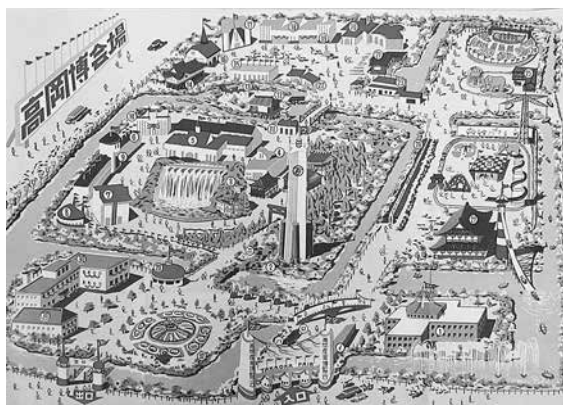


「富山復興都市計画施行区域図」（『富山戦災復興誌』より）

コラム 戦後復興のシンボル―高岡と富山の産業博覧会―

昭和二十六年（一九五二）に「高岡産業博覧会」が高岡古城公園で開催された（会期、四月五日～五月二十五日）。北陸初のテレビジョン館・貿易館・電源館などが設けられ、さらに昭和二十九年に「富山産業博覧会」が富山城址公園・魚津水族館で開催された（会期、四月十二日～六月四日）。これにあわせて、富山市庁舎・富山市公会堂が新築された。博覧会のシンボルとして建設された富山城（現・富山市郷土博物館）では、会期中「美の殿堂」として美術展や展覧会が開催された。

これらの博覧会は、富山県の戦後復興のシンボルであり、いずれも豊かな電力をテーマに郷土産業の発展が紹介された。また、こうした博覧会が、戦後の富山県の商工業や交通機関の発達など地域経済の復興・発展に与えた影響は極めて大きかった。



高岡産業博覧会パンフレット（高岡市立博物館蔵）



富山産業大博覧会（『富山産業大博覧会誌』より）

高度経済成長期の富山県

①黒部ダム建設とアルペンルートの開通

今年、黒部ダムが建設されて五十年を迎えた。黒部ダム建設は、戦後、電力不足に悩む関西地方の電力需要を賄うため、関西電力が社運をかけて取り組んだ事業である。

黒部ダム建設は、立山・黒部アルペンルートの整備（昭和四十六年全線開通）につながっただけでなく、黒部峡谷や宇奈月温泉が観光地となるきっかけともなった。今日、「自然環境との調和」から生まれた観光資源としてますます重要になっている。

②富山県総合開発計画

戦後日本の再建のため、政府は昭和二十五年（一九五〇）に「国土総合開発法」を制定したが、都道府県で総合開発計画の先陣を切ったのが富山県であった。昭和二十七年、「富山県総合開発計画」が策定された。一九六〇年

代までに、戦前の経済水準に復興することを目標とし、水資源活用を軸とした政策などがもりこまれた。今日に至るまでこの総合開発計画は、将来を見据えた県政の推進役を果たしている。

③富山・高岡新産業都市の指定

昭和三十九年に富山・高岡地区が新産業都市に指定された。重化学工業中心の臨海型拠点開発が目指され、富山新港や太閤山ニュータウンの建設、富山―高岡間を結ぶ国道八号線のバイパス工事が進められた。また、北陸自動車道の整備や北陸線の複線電化も促進された。

④公害の克服に向けて

高度経済成長期の著しい工業発展の一方、富山県では岐阜県神岡鉱山から流れ込んだカドミウム汚染によるイタイイタイ病や大気汚染、騒音、悪臭などの公害が表面化し、「公害デパート県」とも呼ばれた。昭和四十二年に公害対策基本法が制定されると、翌年三月に「公害防止条例」を制定、昭和四十五年には全国初の「公害部」を設置した。今日の富山県では、大気、



富山新港（『置県百年 富山県』より）

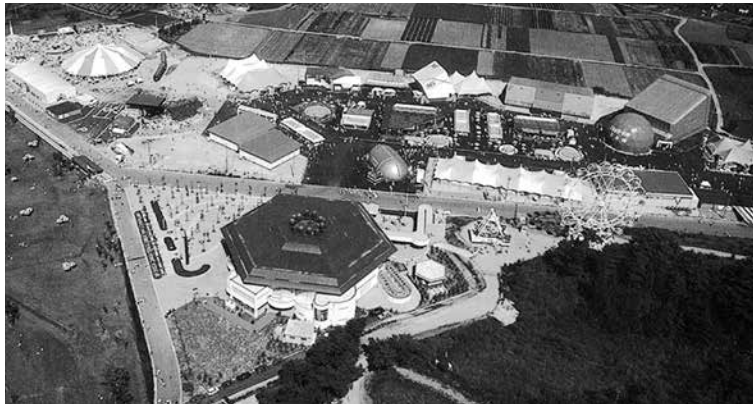
水質をはじめ各種の環境基準がほぼ一〇〇％達成される良好な状況となっている。

コラム 新世紀に向けた県民参加の博覧会

昭和五十八年（一九八三）に、「にっぽん新世紀博覧会」が小杉町の県民公園太閤山ランドで開催された（会期、七月十六日～九月十五日）。

県民総参加によって、この新世紀博覧会は、豊かなローカル色と獨創性に富んだ前例のないユニークな地方博となった（入場者数一一三万六八三二人）。

また、平成四年（一九九二）には、「第一回ジャパンエキスポ富山'92」が、同じく県民公園太閤山ランドで開催された（会期、七月十日～九月二十七日）。この博覧会は、通産省が提唱するジャパンエキスポ制度の第一号であり、新しい時代の人間の生き方・地域のあり方・豊かなライフスタイルを世界に向けて提唱した（入場者数二二六万五八九三人）。



新たなふるさとづくり―「元気とやま」をめざして―

①コンパクトな県政

明治三十二年（一八八九）に市制・町村制が施行され、富山県内では富山市・高岡市の二市と三二町二三八村が誕生した。昭和初期に政府及び県によって

町村規模の拡大方針が出され、昭和二十年（一九四五）時点では、二市二九町一八三村であった。

その後、昭和二十八年の「町村合併促進法」により「昭和の大合併」が進められ、昭和四十四年には九市一八町八村（三五市町村）になった。そして平成十六年（二〇〇四）の「市町村合併特例法」制定以降、「平成の大合併」が進められ、平成十八年には、全国最小数の十市四町一村（一五市町村）になり、行政のスリム化・広域化が進められた。

②少子高齢・人口減少社会における富山県

富山県の人口は、平成十年（一九九八）年の一一二万六千人をピークに減少している。そのため、子育て支援・少子化対策を強化するとともに、若者の県内定住の促進、女性や元気な高齢者が意欲・能力に応じて社会で活躍できる環境整備等が一層重要となっている。

③グローバル社会における富山県

グローバル社会の今日、国家間の相互依存関係が緊密化し、異なる文化をもつ国々との相互理解と、より一層の国際協調が求められている。環日本海・アジア交流の拠点となる富山空港の国際空港路線拡大や、日本海側の「総合拠点港」伏木富山港は、中国・韓国・ロシアなど対岸諸国との結びつきを一層深める取り組みが進んでいる。環日本海・アジア地域の玄関口として今後ますます重要性を増すことが期待されている。

④特色あるまちづくりと地域の活性化

富山県の各地では、歴史や文化・伝統など地域の特性を活かし、先駆的な魅力あるまちづくりが進められている。特に、富山市の「公共交通を軸としたコンパクトなまちづくり」や、高岡市の「歴史と文化を活かしたまちづくり」は、全国的にも注目されている。

おわりに

富山県の誕生までには様々な紆余曲折があった。中央政府の方針と越中人の分県運動が実を結び、明治十六年（一八八三）五月九日によくやく現在の富山県が誕生した。明治期は、治水事業や道路・港湾・鉄道などのインフラ整備により産業基盤を整え、工業化を促進し、都市の近代化が図られた。大正から昭和戦前期には、治水から水力発電事業を進展させ、豊富で安価な電力を基盤に工場誘致を進め工業県へと転換した。戦前、本県は日本海側有数の工業地帯を形成し、日本一のアルミニウム生産県でもあった。しかし、皮肉なことにそのことが、終戦間際の富山大空襲という焼失率全国一の惨禍につながった。

戦後、富山市の復興計画事業、高岡・富山の二つの産業博覧会を起爆剤とし、富山県は不死鳥のように急速に復興を遂げた。その後、高度経済成長期の発展に付随して発生した公害問題も乗り越え、新世紀を見据えた県政が推進されてきた。その結果、今日富山県は、比較的災害が少なく「安全・安心で住みよい県」として全国でも高い評価を受けている。

ふるさと富山の百三十年のあゆみを振り返ると、暴れ川の洪水に悩まされてきた水との戦いから利水（水力発電）により本県が発展したことや、空襲により九九・五%が破壊された富山市が、一から出発して復興を遂げたことにみられるように、郷土の先人たちは、苦難を英知と不屈の精神で乗り越え、郷土づくりに取り組んできた。今後とも我々はこの先人たちの精神を受け継いでいくことが肝要である。

現在富山県では、平成二十七年（二〇一五）の北陸新幹線開通を間近に控え、伏木富山港の日本海側の総合的拠点港への選定、富山空港の国際航空路線の充実など、陸・海・空の交通インフラ整備が大きく前進している。高志の国文学館・イタイイタイ病資料館の開館をはじめ、歴史を伝え後世に活かそうとする文化事業も活発である。これからも富山県は、世界に誇れる雄大な立山連峰や世界遺産の五箇山合掌造りなど、豊かで美しい自然や歴史・文化・伝統をいかし、教育県・文化立県として歩んでいくことであろう。

参考文献一覧

	書名	編著者	出版年	発行・出版
1	『富山県史』通史編Ⅴ近代上	富山県	1981	富山県
2	『富山県史』通史編Ⅵ近代下	富山県	1984	富山県
3	『富山県史』通史編Ⅶ現代	富山県	1983	富山県
4	『富山県史』史料編Ⅵ近代上	富山県	1978	富山県
5	『富山県史』史料編Ⅶ近代下	富山県	1982	富山県
6	『富山県史』史料編Ⅷ現代	富山県	1980	富山県
7	『富山県史』近代 統計図表	富山県	1983	富山県
8	『富山県の百年』県民百年史16	梅原隆章・奥村宏・吉田隆章	1989	山川出版社
9	『とやま近代化ものがたり』	高井進監修・富山近代史研究会編著	1996	北日本新聞社
10	『越中から富山へ―地域生活論の視点から―』	高井進	1998	山川出版社
11	『富山の知的生産―先人に学ぶ情報の発信―』	富山学研究グループ	1992	富山県
12	『ふるさと富山歴史館』	深井甚三・米原寛監修	2001	富山新聞社
13	『新・元気とやま創造計画 みんなで創ろう！人が輝く高志の国』	富山県	2012	富山県(知事政策局)
14	『高校生のためのふるさと富山』高等学校郷土史・日本史学習補助教材	郷土史・日本史教材作成委員会	2013	富山県教育委員会
15	『ルメイ・最後の空襲―米軍資料にみる富山大空襲―』	中山伊佐男	1997	桂書房
16	『富山県の昭和史』	高井進監修	1991	北日本新聞社
17	『高岡市市制100年記念誌 たかおか―歴史との出会い―』	高岡市制100年記念誌編集委員会	1991	高岡市
18	『特別展 富山の近代化～街はこうしてつくられた～』	富山市郷土博物館	2000	富山市教育委員会
19	『特別展 殖産興業と博覧会』	高岡市立博物館	2002	高岡市立博物館
20	「明治十五年の石川県々治改革についての山田内務卿の上申書」(『富山史壇』第131号)	浦田正吉	2000	越中史壇会
21	「山田顕義と藤井能三―富山県分県の「功労者」―」(『富山史壇』第152号)	浦田正吉	2007	越中史壇会
22	「初代県令国重正文について―防災・防疫の視座から―」(『富山史壇』第169・170合併号)	貴堂巖	2013	越中史壇会
23	「国重正文と木戸孝允の交詢」(『近代史研究』第36号)	貴堂巖	2013	富山近代史研究会

関 連 年 表

年号	西暦	事 項
明治16年	1883	富山県が石川県から分県（5・9）、初代県令国重正文 富山県庁開庁（7・1）、第1回通常県会開催（10・1）
明治18年	1885	富山県中学校が富山町総曲輪に開校
明治19年	1886	コレラ大流行（死亡者10764人）
明治22年	1889	市制・町村制施行（2市31町238村）、伏木港が特別輸出港となり税関が設置
明治30年	1897	中越鉄道、高岡－福野間開通
明治32年	1899	大久保発電所の操業開始、伏木港が開港場に指定される
明治33年	1900	庄川の小矢部川分離工事始まる、中越鉄道が高岡から伏木へ延伸される
明治34年	1901	神通川馳越工事に着手（～明治36年）
明治39年	1906	立山砂防工事に着手（20ヶ年継続事業）
明治42年	1909	神通新大橋（連隊橋）竣工 皇太子行啓（9・28～10・3）、この年県内各地で皇太子行啓記念行事が行われる
大正2年	1913	富直線（北陸本線）全通（米原～直江津） 富山県主催1府8県連合共進会開催、富山市内電気軌道開通、魚津町に水族館開館
大正4年	1915	「富山県産業奨励方針」が出される
大正7年	1918	新川地方を中心に米騒動がおこり、全国に波及
大正9年	1920	県営水力発電事業開始
大正10年	1921	この年、県内の工業生産額が初めて農業生産額を上回る
昭和3年	1928	富山都市計画事業決定
昭和5年	1930	富山県庁焼失
昭和6年	1931	神通川廃川地埋め立て・富岩運河開削工事始まる
昭和8年	1933	婦負郡倉垣村に富山飛行場開設、日満アルミニウム富山工場設立
昭和9年	1934	飛越線（高山線）開通、富山県が発電力（水力）で全国1位になる
昭和10年	1935	富岩運河完成、富山県庁が神通川廃川地に完成、NHK富山放送局が開局
昭和11年	1936	日満産業大博覧会が神通川廃川地で開催される
昭和20年	1945	富山大空襲にて富山市街地の大半が焦土と化す（8・2）、終戦（8・15）
昭和26年	1951	高岡産業博覧会開催
昭和27年	1952	富山県総合開発計画策定
昭和29年	1954	富山産業大博覧会開催（富山・魚津両市）
昭和38年	1963	富山空港開港、黒部ダム完成
昭和39年	1964	富山・高岡地区新産業都市に指定、太閤山ニュータウンの造成に着手
昭和43年	1968	富山新港開港、イタイイタイ病を公害病と認定
昭和46年	1971	立山黒部アルペンルート全線開通
昭和58年	1983	置県百年記念式典、にっぽん新世紀博覧会開催
昭和59年	1984	富山新空港開港（ジェット機就航）、中国遼寧省と友好提携
昭和63年	1988	北陸自動車道全線開通
平成4年	1992	第1回ジャパンエキスポ富山'92開催
平成5年	1993	富山～ソウル便就航
平成6年	1994	富山～ウラジオストク便就航
平成7年	1995	五箇山合掌造り集落が世界文化遺産に登録
平成9年	1997	瑞龍寺が国宝（県内初）に指定
平成19年	2007	元気とやま創造計画策定
平成20年	2008	東海北陸自動車道全線開通、元気とやま観光振興条例制定
平成23年	2011	伏木富山港が日本海側の「総合的拠点港」に選定
平成24年	2012	イタイイタイ病資料館開館、高志の国文学館開館、新湊大橋開通
平成25年	2013	5月9日を「県民ふるさとの日」と定める条例の制定

年表では特別企画展の展示物・パンフレットに記載したものを中心に取り上げた。

企画展史資料一覧

	史資料名	所蔵	実物	パンフ	パネル	ポスター	ちらし
富山県の誕生と県政のはじまり	「旧新川県引渡演述書写」	富山県公文書館（海内家文書）	○				
	「明治12年編製 石川縣治概覧 全」	富山県公文書館（海内家文書）	○			○	○
	「石川県婦負郡書記任命書」	富山県公文書館（浅野家文書）	○	○		○	○
	「富山県婦負郡書記任命書」	富山県公文書館（浅野家文書）	○			○	○
	「富山、佐賀、宮崎、三県県印彫刻ノ件」	国立公文書館	複製				
	「分県之建白」	入善町米澤記念館	複製				
	「石川県県治改革ノ件」	国立公文書館	複製				
	「富山県設置の裁可書」	国立公文書館	複製				
	「富山県設置の太政官達」	富山県公文書館	○	○		○	○
	「富山県創立費増額トシテ十五年度常用金内ヨリ支出」	国立公文書館	複製				
	「富山名所（県庁・議事堂）」	富山県公文書館（河尻家文書）	○	○		○	○
富山県（明治期） 産業基盤整備と近代化する	「富山名所（神通橋・長岡御廟所）」	富山県公文書館（河尻家文書）	○	○			
	「森山知事により河川改修に関する上申案」	富山県公文書館	○				
	「富山県知事稟申富直鉄道ノ儀ニ関スル件」	国立公文書館	複製	○			
	「西部通信局長宛濱田知事電気軌道着工依頼文」	富山県公文書館	○		○		
	富山城下絵図	富山市郷土博物館	○				
	「明治18年富山市街見取全図」	富山市郷土博物館	○				
	『伏木築港論』	富山県立図書館	○				
	中越鉄道路線図	富山県立図書館	○		○		
	一府八県連合共進会絵葉書	富山市郷土博物館	○				
	一府八県連合共進会リーフレット	富山県公文書館（河尻家文書）	○	○			
利水と富山県の発展（大正・昭和前期）	『経世小策』	富山県立図書館	○	○			
	「富山県産業奨励方針」	富山県公文書館	○				
	大正2年富山市全図	富山市郷土博物館	○				
	富山県主催一府八県連合共進会図面要覧	富山県公文書館	○				
	拝謁之証	富山県公文書館	○				
	「大正15年富山都市計画区域決定通知」	富山県公文書館	○				
	「昭和3年富山都市計画事業計画平面図」	富山県公文書館	○				
	「昭和6年富山都市計画図」	富山県公文書館	○				
	『東岩瀬港』	富山県公文書館（碓井家文書）	○				
	「昭和11年富山県観光交通鳥瞰図」	富山県公文書館（高田家文書）	複製	○			
戦後のあゆみ（昭和中期・平成）	生活必需品への切符制度実施を求める国への要望	富山県公文書館	○				
	空襲予告ビラ	富山県公文書館（庭田家文書）	○				
	高岡産業博覧会パンフレット・前売入場券	高岡市立博物館	○	○			
	富山産業大博覧会会場絵葉書	富山県公文書館（海内家文書）	○	○		○	○
	『富山県総合開発計画』	富山県公文書館	○				
	工場誘致想定図	富山県公文書館	○				
	富山県公害防止条例（富山県報号外）	富山県公文書館	○				
	『高岡市隣接町村合併記念』	富山県公文書館（碓井家文書）	○				
	『富山県民総合計画』	富山県公文書館	○				
	『新・元気とやま創造計画』	富山県公文書館	○		○		
	県民ふるさとの日を定める条例（富山県報）	富山県公文書館	○				
	『につぼん新世紀博覧会公式記録』	富山県公文書館	○				
	『第1回ジャパンエキスポ富山'92公式記録』	富山県公文書館	○				



■交通機関

JR富山駅発バス

- ・北代循環(県立図書館前)下車……………徒歩3分
- ・四方經由新港東口行(県立図書館前)下車…徒歩3分
- ・高岡小杉方面行(呉羽山公園)下車……………徒歩10分